

ジャニーズ事務所記者会見の空気 同調圧力への批判力を＝ 金平茂紀



2023/10/7

気が重いが書く。ジャニーズ事務所による2回目の記者会見だ。ここに記すのは、会見内容よりは、あの会見を覆っていた空気、圧力、価値観の刷り込みといった事柄だ。その場での一部記者の不規則発言を巡り、メディアの内外でさまざまな反応がみられた。

ジャニーズ事務所側は「**㊦**1社1問」「こちらが発言者を指名」「所属と氏名を名乗れ」なるルールを一方向的に宣言した。首相官邸の記者会見じゃあるまいし、本来従う必要はない。**㊦**記者たちは直ちに抗議してもよかった。だが、大多数はそのようなルールを課されることに慣れてしまっているのだ。僕が驚いたのは、ジャニーズ側の**㊦**井ノ原快彦氏が「子どもたちも(この会見生中継を)見ている。ルールを守る大人たちの姿を見せていきたい。どうか、どうか落ち着いてお願いします」などとなだめる発言をした際、**㊦**会場の一部から拍手が起きたことだ。これをどうみるかで、社会はほぼ二分されている。

不規則発言やヤジ、怒号は会見の進行を妨げる場合も多い。ただ、「**◇**円滑な進行」が無内容な会見をもたらしてきた現実を、僕も多くの経験から知っている。

移民問題などを追及していたCNNのジム・アコスタ記者がトランプ米大統領(当時)の記者会見で、大統領の制止を振り切って質問し続けたシーンを僕はよく覚えている。彼は会場から排除され、ホワイトハウスは彼の記者証を没収したが、記者会などが一致して抗議。のちに返還され、アコスタ記者は会見室に拍手で迎えられた。何という違いか。

かつてルーマニアの**チャウシェスク独裁政権**が滅んだきっかけは、**政権支援集会でたった一人の参加者が発したヤジ**だった。その意味では、記者会見とはどうあるべきなのか、それを考えるきっかけを与えてくれたのかもしれない。僕は **◇ 魯迅の短編「賢人と馬鹿と奴隷」**を思い出す。私たちは奴隷になっていませんか、と。

付言しておく、不規則発言をする側のスタイル(口調・発言の長さ)が☺もうちょっと魅力的じゃないと共感を得られない。もう少し相手を「脱力」させるような攻め手がないものか。**その点で、!!NHKの「会見」NG 記者リスト存在のスクープは見事だった。**

だがそんなことより**最も大事なもの**がある。それは、☹長年沈黙していたメディアが今度は手のひらを返したかのように、自らの責任を問わず、新しい流れへと同調する動きに対する徹底的な批判力だ、と僕は思う。(テレビ報道記者)

10/6. ジャニーズ「NG リスト」広がる波紋 どこが問題？ 識者の見解

深掘り [青島顕](#) [伊藤遥](#) [吉井理記](#) 有料記事

2023/10/6 19:19(最終更新 10/6 19:20)

記者会見で質問に答えるジャニーズ事務所の東山紀之社長(右)とジャニーズアイランドの井ノ原快彦社長＝東京都千代田区で2023年10月2日、武市公孝撮影

ジャニーズ事務所が開いた記者会見で、指名する記者の「NG リスト」が作られていた問題が波紋を広げている。記者会見の進行を担当したコンサルタント会社は「円滑な進行のため」としているが、公正さの観点からは疑問符が付く。この問題をどう見ればいいのか、識者に尋ねた。

ジャーナリストの江川紹子さん

どこも満足できない結果に



実際どうだったのかはともかく、NG 記者リストには記者選別の意思を感じる。

指名されなかった記者は意図的に排除されたと受け止めたはずだ。記者も、ジャニーズ事務所も、コンサルタント会社も、どこも満足できない結果になった。

本来は、会社の信頼を回復するための記者会見だったはずなのに、批判をやりすごすことが目的になっていなかったか。

広報とは、社会と対話し、コミュニケーションを取ることだが、ジャニーズ事務所はこれまで、黙って言うことを聞くメディアとファンだけを相手にしていればよく、まともな広報の経験がないのではないか。今はそうはいかない。批判的な人を含めていろんな人たちとのコミュニケーションが求められているのに、どうしたらいいのか分からないのかもしれない。

会見の内容を見ても、❌ 取り組まなければならないことが分かっていないと感じる。社名変更も大事だが、どのような基準で被害者に補償をするのか。年齢や被害の程度といった要素をどのように考慮するのか。いつまでに実行するのかを決め、説明すべきだった。

何をすべきかを理解し、発表できることを整理して、記者会見をやり直すべきだ。会場代やコンサル会社に費用を掛けるよりは、そうしたお金は補償に充て、！ 日本記者クラブで記者会見をしてはどうか。司会はクラブ側に任せ、経緯を把握している人が説明すべきだ。

記者会見の形式もよく考えるべきだ。「1社1問」で、追加の質問ができないようなやり方をあたかも正当なルールのように押しつけるべきではないし、そういう印象を世の中に与えるのも間違っている。

近年、記者会見が開かれた場になってきたのはよいことだが、半面で会見そのものがコンテンツとして商品化され、ショーのようにになっているケースもある。記者や報道機関の側も、十分な回答がない場合には連携して質問を重ねるなど、中身のある会見にするよう努めるべきだ。【聞き手・青島顕】

法政大教授の上西充子さん

事態を収める力量なかった

記者会見を開く側は「メディアをコントロールしたい」という思いは当然ある。司会者だって、記者を選んで指名しているはず。主催者から見れば、記者会見はそもそもそういうものだと言っている。首相だって、記者会見では自分が言いたいことだけ言えればよい、記者との質疑応答は余分だと思っているはずだ。

ジャニーズ事務所はなぜ記者会見を開くことを選んだのか、その意図を考える必要がある。一連の性加害を巡り、記者会見を求める声が大きかったのは事実であり、そんな中で、会見を開けば確かに注目が集まる。だが、さらに大きな批判を受けるといったリスクも伴う。そこでジャニーズ側は、リスクをコントロールした上でイメージを回復できると考え、会見を選んだのだと思われる。そういうコントロールをするために、メディアや記者を選別し、都合の良い人を指名して質問させ、そうでない人は黙らせておく。さらに、人気タレントでもある東山紀之氏や井ノ原快彦氏を表に出しておけば難を逃れられると考えたのだろう。

だが問題の深刻さに比べ、！あまりに準備不足だったと言わざるをえない。会見で、事態を収めるだけの力量はなかった。本来は「指名 NG リスト」などを作らず、厳しい質問をする記者に正面から答えてみせれば、信頼回復の足がかりになっただろう。さらに「NG リスト」の存在が明らかになった後の対応も拙すぎた。

一方、ジャニーズにそんな振る舞いを許したのは、メディアの側にも原因がある。これまで、タレントを起用できなくなったら面倒だからとジャニーズに問題があっても触れないようにしてきた。その結果、健全な緊張関係が築かれず、きちんと振る舞うべき時にそれができない事態を招いてしまった。

もう一度会見をやり直せ、という声もあるが、もし会見をするなら力量を持った人物を外部から改めて社長として招き、事態を收拾するしかない。【聞き手・吉井理記】

「質問させろ！」記者会見で怒号

東京都内で2日に開かれたジャニーズ事務所の2回目の記者会見には、毎日新聞の記者を含む約300人の報道関係者が詰めかけた。開始から約30分後、質疑応答の時間になると、司会者は「会場の使用時間に限りがあり、なるべく多くの方からご質問をいただけるよう、1社1問でお願いします」と要請した。報道陣から異論は出ず、20人以上の記者が指名を求めて挙手した。

会見が荒れ始めたのはその約30分後。指名されていない記者がマイクを持たずに質問を投げかけると、一度は東山紀之社長らが回答したものの、その後も指名されないことにしびれを切らしたのか、同じ記者が再び質問を開始。司会者が「1社1問」と制止す

ると、会場では「関連質問させろ！」「司会者が仕切れ！」という両論が飛び交い、ジャニーズアイランドの井ノ原快彦社長が「落ち着きましょう」となだめるまでに。その後も指名を求める複数の記者が抗議の声を上げ、会場には度々怒号が響いた。

会場では記者(伊藤)は「NGリスト」の存在に気付かず、指名されない記者がリストアップされていたとは思ひもしなかった。会見を仕切ったのはコンサルタント会社「FTIコンサルティング」(東京)だったにせよ、ジャニーズに公正な記者会見をする責任があるのは言うまでもない。【伊藤遥】